

討論要旨

討論は田中暁龍氏を司会として進められた。

まず史料中の語句などについて基礎的な質問があった。

続いて箱石大氏のコメントに対して、各報告者に意見が求められた。長坂良宏氏は、視角の立て方の問題や、文化期→文政期→天保期と進めてきた研究対象時期を考えると、幕末維新史を理解する必要を痛感している、と述べた。また、王政復古後、撰家は家の役である撰政・関白が廃止され、「家」としてどう変化したのかについても関心がある、と述べた。家近良樹氏は、二点論点を提示された。一点目は、孝明の人格研究について。歴史学において、人物の内面にどこまで立ち入るべきかという問題がある。かつて西郷隆盛の内面に触れたが『西郷隆盛と幕末維新の政局』ミネルヴァ書房 二〇一一年)、先行研究には「内面に触れない」というものもあった。しかし内面に踏み込まない人物研究とは可能なのか。どこまで踏み込んでよいのか線引きは永遠の問題でもあると述べた。二点目は、王政復古について。国事御用掛の廃止について触れられたが、国家の体制を鎖国から開国へ変える際に、攘夷派であった国事御用掛が障害となって廃止されたのではないかと述べた。

箱石氏からは、家近氏の意見に対し、幕末史の天皇・朝廷研究

が孝明天皇研究に偏っていたため、他の具体的な機構等も実証的に研究しなければいけないため、あえて言った。危険性はあっても、内面に踏み込む人格研究は重要である、と述べた。

続いて、会場からの意見が求められた。

まず間瀬久美子氏から、長坂氏が朝廷の役への役料と、公家衆が幕府の統治を「仁政」と評した、との二点から、朝廷が幕府へ「すりよった」と評価したことについて疑義を呈した。長坂氏は、幕府が朝廷に「すり寄」ったとした藤田覚氏の文言（「天保期の朝廷と幕府」『日本歴史』六一六号 一九九九年）を利用した。どう使うかは検討すべきであり、反省している。「仁政」とする評価は他に管見では見出せない。幕府は朝廷に「すり寄」っているのか、という疑問から使った、と述べた。

次に村和明氏から長坂氏に対し、これまで研究されてきた文化期と今回の報告の文政期とは、朝幕関係に変化はあったのかなかったのかとの質問があった。朝廷は光格天皇から仁孝天皇へ移り、幕政の中心も変化する。また文政期の幕府が貨幣改鑄によって経済的に安定していた点も影響しているのではないかと述べた。長坂氏は、文政期の関白鷹司政通と仁孝天皇は血縁関係にある。これまでの撰家―武家伝奏―議奏といった機構的取締に、血縁関係を用いた属人的な関わりとなっていたのではないかと見通している。近世初頭には属人的であったものから機構的なものになっていったものが、再び属人的になっていった。鷹司政通の

長期在任についても天皇との血縁関係が影響しているのではないかと述べた。また、文化期から始まった朝廷の様々な交渉が文政期に実行されていく背景には、朝廷側の粘り強い交渉によるのではなく、幕府財政の好転があったためではないか、とも述べた。

続いて石田俊氏から長坂氏に対して、藤田氏は朝幕関係について「寛政期からの変化」を指摘した。しかし今回の報告を鑑みれば近世的な朝幕関係のあり方がそのまま文政期にも続いていたといえる。ではいつからこの関係が変わり始めるのか、との質問があった。長坂氏は、変化する時期についてはまだ不明と述べた。この点に関連して、高埜利彦氏から、天皇・朝廷に役儀を果たすことで將軍から家領を受けていた公家衆が、「役料」を要求するようになった点について意見があった。公家衆は国家の中の役割意識を持っていたから「役料」を要求するようになったのか。白川家は毎朝御拝を務めるため役料を受けていた。武家伝奏や議奏に對する役料とは次元が違うのではないか。家領や下行とは違う論点であるとした。家近氏は、幕末の公家は「朝臣（ちようしん）」としてのプライドがある。大名は官位を通して朝廷と関係がある。下級官人の意識については良くわからない。朝廷の一部しか視野に入っていなかった、と述べた。長坂氏は役料について、「役」に對しての「役料」であるが、「役料」を要求した公家自身は、幕府・国家への奉仕に對するものとは認識していなかったのではないかと述べた。財政窮乏のなかで、家禄加増も望めないために出てきた論

理ではないか。これ以後にも出てくる觀念なのか。今回は提示にとどまったが、知行と役料の関係や役料観を考えていきたい、とした。また家近氏から、朝廷と幕府の上下関係について意見があった。江戸城での勅書受け取り場面では、將軍と勅使との間に明確な上下関係はわかりにくくなっている、と指摘した。高埜氏は、大政委任論ともつながる論点であり、將軍宣下の勅使は文久期まで人づてで將軍へ勅書を渡していた。それ以後は將軍が下座に移り拝領するようになった。文久期に徳川家茂が大政委任論を表明することと関連するのではないかと述べた。

次に田中氏から家近氏に対し、長坂・箱石両氏の報告を受けて、安政期の関白と天皇の関係をどうとらえるのか質問があった。家近氏は、近世のいつから変化の兆しがあるのか、大問題であり、どことは言い切れないが、安政期の孝明天皇と関白鷹司政通との関係は格段に変わる大転換だった。それまで朝廷のリーダーだった関白に変わり天皇の存在が大きくなってくる、と答えた。また鷹司政熙・政通父子の長期政権も重要な問題であり、なぜ孝明天皇は政通の辞任をとどめたのか、考えていきたい、と述べた。最後に若松正志氏から、近世後期政治史については、対外関係との問題もからめて考えていくべきだろう。また、これまでの朝廷内の学問や勉強会と人物の内面研究をリンクさせていくと深みが出るのではないかと、その意見が述べられ、討論は終了した。

(文責 林 大樹)